島根の中山間地から Work as Life

第８回
「不登校」

野中 浩一

私は俗にいう「不登校」の子たちと 16 年間関わり続け、そのご縁もあり「フリースクール（兼、通学型の通信制高校キャンパス)」を 12 年間経営する中で、多少の経験を積み重ねてきた。

その過程で何冊もの不登校やその支援に関する著作を読んできたが、河合隼雄氏が著した「いじめと不登校」ほど、家族や性差や発達、そして時代背景や宗教観など不登校に紐づく数多の事象を網羅している本はないのではないかと感じている。今回はその著書の中の言葉をいくつか引用しながら、そこから連想した私の最近の出来事や生じた考えを紹介していきたい。

MAKE

『生きる力が育っていくための「土壌」として親や教師が存在する。このことを具体的に言うと、「安心して好きなことができる」環境ということになろう。』

私が運営するフリースクール（以下、スクール）では、高校生の年代の子たち 30 名強が日々通ってきている。2 月のこの時期は、学習課題もテストも終わり、皆が卒業式に向けて思い思いに活動している。

卒業式の後には文化祭的な生徒たちの発表の場を設けており、バンドやイラスト展示、お菓子づくりや動画づくりの活動が同時進行で行われ、たった 4 部屋のシームレスな空間は、話し声と笑い声で充満している。

話は多少さかのぼるが、こうした企画を考えるとき、まずは 30 名全員で集会を開き、私のファシリテーションでワークショップを開く。その集会の最中、1 人の男子生徒が「男子が女装をしてメイクする」という企画を表明した。女子何名かからメイクしたいと賛同の声があがった。

私はその男子生徒に「これまでも同じような企画が出ることがあったけれど、人にやらせようとするとだいたい失敗して、発起人が率先してやってもいいという覚悟があればだいたい成功すると思う。自分でやる気持ちはあるかい？」と聞いた。「やります」との答えが返ってきた。

こうして初めはごく少数でスタートしたファッション・メイクグループだったが、その練習回を重ねるごとにオブザーバーの生徒が増えている。

この原稿を書いているまさに今日は、メイクされる側の高校生男子 3 人、メイクする側の高校生女子 3 人で、1 人に 1 人が付いて顔と顔を近づけて 1 時間ほどの練習会が開かれていた。ついでに就職が決まったばかりの女子生徒も一緒にメイク。

する側の女子生徒たちの真剣な表情。される側の男子生徒たちの神妙な表情。興味・関心に基づくそこはかとない活気。あまりメイクに縁がない私でも、それが生徒たちにとって創造性が高い行為であり、真剣に取り組む価値のあることなのだと感じられた。

集う場

『「生きる力を育てる」というのは大変なことである。ハンパなことではできない。しかし、子どもたちに囲まれて、一所懸命に対応していると、自分の「生きる力」がだんだんと強くなってきているのに気づくことだろう。』

このスクールは、集う。
学年や年齢の垣根、男女の垣根はあまりない。

※写真は日常の学習の集いと、春のハイキングの集い。プライバシー保護の加工あり

そこに行きつくまでには、ある程度の時間の経過を要する。
年度の最初ほど、支援者としての私の思考と身体の回転速度は速く、後になるほどに落ち着いて見守れるようになる。大まかな流れは次のようなものだ。

新入生が加わる 4・5 月。学習や活動の時間よりも、お昼休憩やちょっとした隙間の非構成的な時間に注意を払う。こまめに声をかけ、1 人 1 人の感覚や今の状態を理解するよう動きまわる。

だんだん関係ができてくる 6・7 月。ちょっとした行き違いやトラブルが起こることも多い。何かが起こりそうなとき、関係する生徒たちと一緒になって今の気持ちや考えを言語化しながら、関係の間に立って通訳していく。

全体の関係がよく混ざり合う 8・9 月。多くのイベントを催して、関係の軸を増やす。
もはや大人を必要としなくなる 10・11 月以降。ただただ見守りながら、ときおり刺激の種を混ぜる。

そうしているうちに、自然とよく集う集団になる。
そうなるために最も大事にしていることは、1 人 1 人の感覚や考えを自然に表現してもらえる機会をつくることと、それをその場にいる全員で共有できる機会を設けること。

必ずしも生徒同士全員が直接接していなくても、相手の感覚や考えを知る機会があれば、自然と緊張がほどけ不安が和らぐ。

※写真はクリスマスの集いと、生徒・職員が入り混じった日常の勉強の教え合いの集い。
プライバシー保護の加工あり

不登校や不登校ぎみの子は「個別対応から始めないと駄目」だと考える人がいる。
うちの子は同年代が苦手、集団行動が苦手だから、「集団に入るのは無理」と考える人もいる。

大人として、その子の経験からくる傷つき、苦手意識に寄り添うことは大切なことである。それと同時に、その子がまだ気づいていない自身の可能性を体感させて本来持っている力を発揮できる場を提示することも、経験や智恵に勝る大人だからできることであろう。

思春期以降の子どもは、先生や授業以上に、友人関係の中で学び、自分を目覚ましく変化させていく。「不登校」や「人が苦手」といった訴えがある子でも、100 人中 95 人くらいは、すぐにでも大勢の集団

の中でそれなりにやっていける。

その子の力を心底信じることと、その子のその時々の感覚に寄り添うこと、そしてその場所やそこにいる人がその子を脅かさない（安全である）という合意形成さえできていれば。

※写真は授業風景（左上）、自由時間（左下）、こたつを囲んでの談話（右上）、卒業式の計画集会（右下）
　プライバシー保護の加工あり

正義に疎外される悪

『自分はいいほうにいて、悪いヤツを対策によってよくしてやろうというやり方は成功したためしがない。』

虐待、ＤＶ、暴行、性暴力、ハラスメント。
ニュースや記事でこうした暴力や性に関する言葉に触れるたび、これらの「言葉を使う側」のモラルが問われているように感じている。

魔が差したような案件であれ計画的で悪質な案件であれ、これら単純化された同じ言葉で表されることがある。被害の大小ではなく、人の関心を惹くものほど大きく取り上げられる傾向がある。

また、昨今は加害と被害を分けるうえで、被害者側の主観や精神的苦痛といった目に見えないものを根拠とする場合もある。

地震や豪雨であれば、危険度が数値によって明確に表されるため危険を共有しやすいが、主観による苦痛は明確に捉えることが難しく、それゆえ過剰に共感されてしまい、正義を自認する側による「悪」の製造と、悪への「攻撃」の正当化の両方を促しているように感じられる。

それこそ主観になるが、近年、暴力的で自己中心的な犯行が多発する一方で、こんなことでも逮捕されるのか、この件はここまで大々的に晒されなければならないのかと、報道に驚くことも多い。

レッテルを増やすと、悪者が増える。
しかし逮捕されても、その人が消滅するわけではない。
早晩、社会的な負債を抱えて戻ってくる。

こうした負債を抱える人を安易に増やすことは、中・長期的に見れば犯罪の増加や集団化、社会の不安定化や極端な思想の台頭を招きかねないと危惧せずにはいられない。人口減少で危機への対応力が減退し続ける日本にあってはなおさらである。

清き水を求めすぎたとき、そこにあった淀みや汚れはどこに行くのか。
その浄水にどれだけの魚が棲めるのだろうか。

「行きなさい」

『指導しない。言って聞かさない。何もしない。しかし、居るということ、これが出来たらもう最高なんです。』

この言葉は、「教育」の育の部分の大切さ、「育つ」をつぶさに見守ることが大事であることを表している。私も 2 人の子をもつ父として、このことは教師だけでなく、親にも当てはまることだと感じている。

高校卒業シーズン。生徒のお母さんからお礼の電話をいただいた。
これまでいろいろあった中で卒業が決まったことへの喜びの声だった。

人と話すのが好きで社交的な子。だからこそ頑張りすぎて疲れてしまうことがある。机上の勉強はそれほど得手ではないが、身体を動かして働くことにはやりがいを感じる。学校でみんなと同じように頑張りたいけれど、できなかったり気持ちが荒れたりで、勝手な行動をとる子とレッテルを貼る人もいる。これまでそんな子を何人か見てきた。

電話口で「お母さんの心からの後押しがあってのことですよ。特にここ最近は、難しい時期に何度も力強く押し出してもらっての卒業です」と伝えると、

「できるだけ『行きなさい』と言わないようにと言ってもらって、それで安心していられました」とのお返事。

3年前、この子は私のフリースクールを辞めると言って三者面談に臨んだ。

私はそこでお母さんに対して「来られない中で学校に行きなさいと言っても母子ともに苦しむだけで効果がないと思います。」と前置きしたうえで、

「言えば言うほど子どもはふさぎ込んでしまうし、かといってお母さんが言いたいのに我慢するのもよくない。だから言い過ぎはよくないけれど、本当に言いたくなったときは言ってください。」と伝えたように覚えている。

ここで大事なポイントは、面談での話の中身ではなく、この話を本人と母と私と一緒に共有して、一緒にこれからを模索したことだと感じている。

面談中、誰が誰を怒るでもなく責めるでもなく、（本人は不機嫌であったが）本心とは裏腹な感情や作為も秘めず、ただお互いを理解するためだけの結論のない時間が流れた。「学校を辞める」という子と、「辞めてほしくはないけど本人が行かないというなら仕方ない」という母と、そのことを確認する時間だけが流れた。結果的に、この子は続けることを選んだ。

子どもが不登校となり、親が子に「あなたのために言ってるの」とアドバイスするとき、親自身の不安やいら立ち、世間体が大きく加味されていることがある。ただもちろんそのときは親も必死で、本当に「あなたのため」と思いながら怒っている。日々の仕事や家事の忙しさもあり、思い通りにならない日々にストレスを募らせてつい言葉にトゲが出てしまうことは、良くないながらもごく自然なことである。

こうしたたくさんの挫折やイライラやもやもやを経ると、親子ともに変化が生じることがある。
わが子が学校に行ったり行かなかったりの日々が続く中、「行きなさい」と言って諍いが起きた過去を省みて、「この子は今どういう気持ちなんだろう」と理解しようとする気持ちが芽生える。どのタイミングで何を言ってあげたらこの子に届くのかと、わが子との会話や関係づくりを通じて模索する日々。加えて言っても聞かないだろうという諦めも少々。

あれから3年。順風満帆とはいかず、間で何度も浮き沈みがあった。
そんな日々の積み重ねの最中、お母さんが「今日は行かないといけない踏ん張りどきだ」と感じたとき、勢いよく発せられる渾身の「行きなさい」は、さぞ力強いことだっただろう。

この行きなさいは、子どもがふさぎこんだり、反抗したり、気分が萎えたりする説教言葉ではなく、元気と勇気をくれる「行きなさい」になる。

余談であるが、私がスクールカウンセラーとして勤務する学校の先生の中からも、このお母さんのように、ここぞという要所での温かく力強い言葉かけを聞くことがある。聞いているこちらも気持ちがよくなり、言葉をかけられた生徒もエネルギーが注入されて自然に身体が動くのを見ることがある。

偏人の援助論

『母親は「みんな一緒にやりましょう」「みんな同じに」ということを大事にします。これに対して、父性は「これとこれは違う」といった「個」の厳しさを持っている。』

手前の話で恐縮であるが、私についても少々触れたい。心理士がフリースクールを運営しているというと、優しい人が手厚く支援してくれるイメージを持たれることがある。

しかし私は、その子にとって必要最低限の支援はどこまでで、カットできそうな支援はどれか、常に生徒の成長や変化とともにケアやサポートを引き算していこうと見定めている。支援を差し引いていく、支援ケチな考え方の人間である。

加えて、私は自分がこうだと思ったことは基本的に曲げない。かなり以前に生徒が、「野中さんて普段大体のことは聞いてくれるけど、時々どんな武器で攻撃しても全然効かないダメージゼロのとき（頑として聞かないとき）がある」と、的確な比喩で私を表してくれた。

私は「仕事だから」子どもたちと関わっているという感覚はない。仕事だからこその責任を果たすことは当然であるが、やはり私はその子（およびその家族）と関わりたいから関わるのである。いやなことはいやだと言う。おかしいと思うことは生徒であれその家族であれおかしいと言う。自分の本心を後ろに置いて、他意や裏のある言葉を言ったりはしない。

とはいえ、いろいろな状態の子が頑張って再起を目指してスクールにやって来る以上、その子の成長の段階により、自分の出し方を変えている面もある。

1 年生のときは直接的かつ積極的に生徒を支える「補助輪」。2 年生のときはふと存在が忘れられることもある部屋の片隅の「観葉植物」。3 年生のときはできることも増え自立心が芽生えた生徒たちが外の世界に出ていくうえで突破すべき「壁」。生徒個々や集団の塩梅を見ながら、このように立ち位置を変化させているように感じている。

誰のための

（フリースクールのような自由な場にも）『いろいろな人がいて、集団というか、実際には小社会なわけで、好き勝手にやっていてうまくいくということはあまりない。お互い同士でぶつかりあうし、あんなヤツは嫌いだと思われますから、自分でも不愉快なことが生じてしまう。そんな試行錯誤のなかで、成長していきます。』

上記は、フリースクールのように自由な空間だと怠けたりダメになったりするのではないかという問題に対して、「いじめと不登校」の著書の中で河合隼雄氏と対談した、東京シューレ奥地代表の言葉である。

近年はコロナ禍の不登校急増に伴い、「不登校特例校」が脚光を浴びているように感じている。

一方で、同じく元不登校の子どもたちが多く通う「通信制高校（およびそのサポート校）」に対しての規制や管理の風当りは強くなる一方である。

不登校の子をサポートするためには、その子の根っこに付着する緊張や不安を和らげること、自由な風土の中で自分らしさを回復することが大切である。そうした子たちを支える組織や団体や職員が主体的に責任をもって仕事をするために、上からなにかに抑えつけられたり、必要以上に時間に追われたりせず、のびのびと生徒１人１人と関われる土壌づくりが肝要である。

対してここ数年の高等学校通信教育の質の確保・向上の取り組みは、少なくとも私の身辺の通信制高校や志ある先生たちを著しく疲弊させていると感じている。制度本来の意図を外れて「説明書類の確保・向上」と「人との関わりの劣化・衰退」を促してはいないか、今後の点検・整備を切に願うところである。

全国に広がる通信制サポート校は私塾的であることが多く、組織としての枠組みも多様（といえば聞こえはいいが実態は玉石混交）であり、利用者が多くなるほどに良くも悪くも世間の注目が集まりやすくなる。規制や管理の声が生じることは、ある意味で仕方のないことだろう。

一方で、その場所がなければ引きこもっていたかもしれない人、将来に希望を見出せなかったかもしれない人が、全国に数多く広がったサポート校のうちの 1 校によって、人との交流やそれに伴う刺激が得られたというだけでも貴重なことだと思うのだが、身内贔屓な考えであろうか。

社会学には「犯罪は公共的な健康の一要因であり、およそ健康な社会にとっての不可欠な一部分をなしている」(Durkheim1895)という捉え方がある。社会の中の不適切な行為は、社会の規則が正常に機能している証だという考え方である。これは犯罪に限らず、ルールの枠から外れるものごとの多くに当て

はまる。

「不登校」という事象自体がもともとの学校の制度設計にとってのイレギュラーである。そのイレギュラーを支える場に規則正しさや一様な基準を求めることは、〝誰得〟※1 で本末転倒な行為に思える。もちろん利用者等に対する著しい不利益事や不法行為があれば、個別かつ厳正に対応したり是正を促す必要はあるだろう。

一方、問題解決のためであれ、予防のためであれ、世論からの防衛のためであれ、一律の規制や管理を増やすことは、悪い部分を浮き彫りにし改善することもあるが、同時にもともとあった良さや人間的な温かみを著しく損なわせる危険性もあると感じている。さらにそうして損なわれたものが数値やデータで出てくることはほとんどない。規制や管理の副産物として失われたものは目に見えず、調査することも困難だからである。

人も組織も、社会の中で揉まれながら試行錯誤して成長する。その中で著しく害をなすものは自然と淘汰され、長く続くものはそれなりに社会に利するところがあると見なされる。それでよくはないだろうか。

大国を治むるは小鮮（しょうせん）を烹る（にる）がごとくす

語句注釈

※1 誰得（ダレトク）　ネット用語で「誰が得することなのか」を疑問視する言葉

引用・参考文献

河合隼雄（2009）「いじめと不登校」　新潮社
長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志（2007）「社会学（新版）」　有斐閣